

NLS 2025 年大会

趣旨説明

「苦しみの愛」

パトリシア・ボスキャン＝キャロズ

タイトル「苦しみの愛」は、不幸な愛と響きあうものです。それは愛や恋愛のドラマチックかつ悲劇的な次元を喚起しています。「苦しみの」という語についていえば、体験した辛さにおける、ある過剰さを漏れ伝えています。こうして、ある種の情動、たとえば悲しみは生きづらさの合図となり、不安は耐えうる限界を乗り越えることを意味するようになります。フロイトは心的苦痛の問題設定の中心に、快原則とその彼岸とのあいだの緊張を位置づけました。ラカンとはいうと、快楽と苦痛が混ぜ合わさった奇妙な満足を明らかにし、それを享楽という語で指し示しました。ロラン・バルトが『恋愛のディスクール・断章』で参照する文学はすべて、愛の苦しみに依拠するものです。つまり愛のもたらす苦痛がさまざまなかたちで現れています。期待、禁欲、恍惚、同情、依存、追放、彷徨、嫉妬など。もっと最近のことでいえば、ソフィー・カルの愛の喪にかんする作品、『甘美な苦痛』という題名もまた、ひとつの逆説的満足を鳴り響かせています。

ラカンの教育活動における愛についての様々なアプローチに依拠しながら、そしてフロイトの貢献にも目を配りながら、私たちが苦しみの愛の源泉を探検してまいりましょう。

欠如、悔しさ、悲しみ

ラカンは『転移』ⁱのセミナーの中で、愛にかんする問題の中心に欠如の機能を置いています。そこからひとつの定義を抽出しています。愛とは持っていないものを与えることである、と。それと同時に、一方の者に欠けているものが他方の者に欠けているものではないことを、強調しています。つまり愛する者 (l'amant) と愛される者 (l'aimé) とのあいだの非対称性が、愛についての問題を構成するということです。「この裂け目に、あるいはこの不一致に捕えられるためには、そこに身を投ずるだけで、つまり愛するだけで十分ですⁱⁱ」とラカンは言っています。まさに欲望と欲望の対象との結合のなさこそが、ある特殊な作用の果てに愛の意味作用を生じさせるに違いないのです。それは愛の隠喩のことです。ここで私たちはラカンがもっと後期に行う主張の前提を認めることができます。それは性的関係のなさを補うものとしての愛のことです。愛の隠喩は偶然性に属します。偶然に奇跡が起こるか、逆の場合は、落胆もしくは悲痛な思いがやってくるのです。プラトンの『饗宴』のなかで、アルキビアデスがソクラテスにからんだ場面は、愛のしるしを与えることを拒否したことへの恨みを証言しています。ソクラテスは愛さなかったのだと、ラカンは主張します。存在に向けられたものとしての愛のしるしの価値とそのインパクトに、彼はすでに注意を払っていました。

補完的な諸存在を集めたり、固めたり、同化したり、密着させるものが愛である、という構想に、ラカンは抗議します。球体という理想のかたちと背中合わせの融合の愛という、あの幻影を、彼は追い払います。同じく、完全なかたちというものに執着することに伴う情動的な部分について、その基礎が想像的構造、「去勢の排除 *Verwerfung*ⁱⁱⁱ」のなかに見いだされることを、彼は指摘しています。

ラカンはフロイトを参照してもいますが、フロイトにとって愛の基礎は *Lust-Ich*、快自我にあり、愛は自己愛^{iv}の結果のことでした。

それで、『幻想の論理』のセミナーで、ラカンは次の定式を発展させます。「きみは私であるところのものでしかない。きみは存在しない、したがって私は存在しない」。あるいは「もしきみが存在しないなら、私は死ぬ^{vi}」と。ラカンは言います。真理は、エロスの意味を与えながら、拒絶されることで、現実界にふたたび出現するのである、と。それは「毎日の生活のなかで、その結果を私たちがかなりよく知っている、ある化け物^{vii}」の形をとりながら出現する、と。彼は続けます。「私がそれをまったくの排除によって言表するので・・・ [略]、愛は、最も不便で最も落ち込ませる効果によって現実界に現れるのです。愛の道は、たやすく拓かれるように示されるものはどこにもありません^{viii}」。愛は考えないということに、ラカンは注意を払っています。言い方を変えるなら、愛はその支えとなっている自己愛的な幻想を、誤認します。だからこそ、愛は、鬱や悲しみの色をまとうことがあるのです。これらの情動が無意識の知の拒絶や拒否を示すかぎりは、そうなのです。

『テレビジョン』でラカンは、悲しみをひとつの道徳的な過ちにはっきりと関連づけ、道徳的な過ちは「思考によってしか—よく言う (*bien dire*) 義務であれ、あるいは、無意識において、構造において自らを再び見出す義務であれ—最終的に位置づけられない^{ix}」と言っています。彼は情動を感動的次元から引きはがし、よく言う倫理に連結します。よく言う倫理とは「言われることができないものを、知のなかで輪郭を描いたり把握することにあります^x」。ジャック＝アラン・ミレールは悲しみとはひとつのしくじった知であると述べています。

テレビジョンと同じ年の「イタリアノート」で、ラカンは精神分析について願いを放っています。「可能性を拓げること。そのおかげで、あの腹立たしい関係を、私たちはなしで済ませることができるでしょう。おしゃべりの身震い—今日に至るまで、腹立たしい関係がそれを打ち立てているのですが—それよりももっと価値のある愛をなすために」^{xi}。

愛と諸ディスクール

しかしながら、宮廷愛というかたちで、相補的で不幸な愛に価値が与えられるのを見るのには、中世を待たなければなりません。ラカンはこのかたちの愛の出現を、異端の

カタリ派とトルバドゥールの新たな詩句との出会いの偶然性に帰属させています。彼にとって情熱の愛とはまずもってディスクールのことであり、それはどんな時代でも生まれるというわけではないのです。ラカンはその「封建制という、途方もない悪夢」と形容していますが、そこで「女の側にももはやまったく立ちゆかない何かがある^{xii}」としています。彼のセミナー、『アンコール』では、〈貴婦人〉(Dame)は完全に男性の臣下であり、男性にとり「性的関係の不在を優雅に切り抜ける^{xiii}」唯一の手段としてディスクールのこの発明を位置づけています。男性は、〈貴婦人〉を理想化することと、貴婦人に接近できないことに価値を与えることによって、実際にそれを切り抜けています。他方、その恋愛のディスクールはといえば、欠如、喪、喪失、死に培われています。『精神分析の倫理のセミナー』でラカンは「シニフィアンの巧妙かつ人工的な組織化^{xiv}」の説明、あるとき禁欲を固定化するこのディスクールの説明に、注目しています。肉欲の喜びを宙づりにすること、迂回するような振る舞い、そして対象の接近不可能性が、快樂と快樂のなさの鍛錬として役に立っています。〈貴婦人〉が騎士に要請する試練の身勝手さがその証拠となっていて、そこにある種の残酷さがないわけではありません。さらにラカンが取りあげるのは、もっとも禁欲的な恋愛の実践がオウィディウスの『恋の技法』から借用されている点で、オウィディウスは愛を一種の兵役にたとえているのです。

同様に、ラカンはあの恋の技法のシニフィアンとその文字どおり文章の、文化への決定的挿入を強調しています。ロマンティックな愛はそのひとつの再出現のかたちなのです。

以上、男女関係を秩序づける伝統というものがあり、愛は伝統が流通させる〈理想〉(Idéal)と関連がないわけではないことを、私たちは見てきました。しかし、この古い秩序、垂直のロジックにより構造化された「〈父〉の時代」は、水平的なロジックに置き換わります。それがジャック＝アラン・ミレールが浮き彫りにしたすべてではない(pas-tout)と隣接するネットワークのロジックです^{xv}。この展望において、夫婦の独房は多様にアレンジメントされた現代的再編成を被っており—「多様な愛 polyamour」あるいは「群れ trouble」というようなアレンジメントのことです—、これらが二人という標準に置き換わっているのです。では愛の苦悩というものはそこで性質を変えているのでしょうか？いずれにせよ、愛の苦しみは今日、以前とは異なった解釈をされています。欠如や失われた対象、接近することのできない〈理想〉により理解されていた愛のディスクールに対して、支配者と支配される者という想像的な軸に失敗を追いやるべつのディスクールが置き換わったのです。前回のAMP大会で、ジャック＝アラン・ミレールは愛の関係についてのそのプレグナンツを確認しました。

その領野がより開かれ発明に適したように思われていた時に、すでにラカンが予言していた男女間の闘争の語彙に属するシニフィアンが侵入を果たしました。影響力、操作、支配、強制、濫用、ゴースティング(音信不通)のことです。それらに随伴して、相互認識に基

づいた同意があると主張された愛のかたち、快原則のホメオスタシスの統制に本質的に支配された愛のかたちが奨励されています。フェミニストによる諸運動がプライベートな領域を政治化しています。権利の主体の平等性という名のもと、法律のディスクールが男と女のあいだに一多くの場合より良き状況のために一置かれることに、フェミニスト運動は貢献しました。しかし今日、新たなフェミニズムといけにえ係僧であるイデオロギーが一緒になったことで、親密性の政治化というものを私たちは目の当たりにしています。この政治化はディスクールの新たな諸規範と一緒にいるにもかかわらず、すでに衰退しかかっているひとつの家父長制に夢中になっています。男女間の戦争が煽られて、多くの場合最悪の結果になります。以降、愛の苦しみを男女間の支配に、この場合、女性にたいする男性の支配に帰属させることのなかに、愛することとその諸リスクの拒否の新しいかたちを見ることはできないでしょうか？最近の映画「バーボー」の世界的成功は確かにそれを示しているようです。

科学のディスクールと背中合わせのこの文脈のなかで、唯一分析のディスクールだけが、エロスの現実界に場所を与え続けていることでしょう。

構造の問題

愛とは、時代によって多様に姿を変える、ディスクールの諸効果に関わっているだけではありません。それはまた構造の問題でもあります。

ヒステリー患者たちのおかげで、フロイトはただちに恋愛の現象に興味を持ちました。彼はその作用を何度にもわたって研究しました。『集団心理学と自我の分析^{xvi}』のテキストで、フロイトは1章をまるごと愛の状態と催眠に捧げました。彼は若い男性の荒唐無稽な愛の例をとり、自我理想の場で称揚された貴重な対象と対峙する、自我の貧困化を例証しました。愛情状態のなかでは、自我理想は最終的に自己愛をまるごと手中におさめるでしょう。それは自我からあらゆる批判精神をはぎ取りながらなされます。フロイトはこの現象を「自己犠牲」と形容し、催眠状態に関連づけています。彼の用いることばは強烈です。対象による自我の吸収、自我の放棄、隷属、熱狂、と言っています。喪、断絶もしくは裏切りを契機として、主体が自身の一部を損なったと感ずることについて—これは苦しむ運命なしにはすまない欠損ですが—、以降、もはや驚きはありません。

最後期の教育活動のなかで、ラカンが愛のドラマをまさに愛の出会いそのものの視点で位置づけようとしています。愛の出会いとはもはや存在の欠如（存在しそこない *manque-à-être*）のふたりの主体にかかわるのではなく、「無意識の知の主体として影響を被った^{xvii}」ふたつの話す身体（*corps parlant*）にかかわるものになります。『アンコール』のセミナーで、彼はこう発言します。「そこには出会い以外の何もかも存在しないのですから。諸症状、諸情動のパートナーにおける出会い、主体としてではなく話す者としてのその追放、性的関係からの追放の痕跡を、各自において印づけるものすべてとの出会いです^{xviii}」。ジャック＝

アラン・ミレールは『治療の骨格』^{xix}のなかで、性的関係のなさ、つまり症状としてのパートナーという展望においては、性別化された存在は享樂の水準でカップルをつくと定式化しています。症状的關係については、享樂の手段としてのパートナーを決定づける、身体のシニフィアンの構造に関係しています。したがって、すべての X (*pour tout x*) の構造とすべてではない (*pas-tout*) の構造とを区別してしかるべきなのです。この構造が性別化の男性モードと女性モードを振り分け、各自の症状としてのパートナーのタイプを決定します。双方とも同じやり方では享樂しないし、愛に苦しむこともない、ということです。男性的話存在 (*parlêtre*) には対象 a に関連して倒錯者の享樂のモードが割り振られ、女性的話存在には斜線がひかれた<他者> (*A barré*) との関連において、ある享樂の無際限性が割り振られています。さまざまな苦しい愛はですから性別化された各自のポジションもしくは各性別に固有のロジックに従って、分配されているのです。症状で囲まれた苦しみが片方にあり、これは肉にとげがささった結果のようなものです。他方、限界のない荒廃と完全な惨状という苦しみがあります。さらには、自らの荒廃に固有の愛情生活の二重化という面倒がある一方で、他方には、現実のパートナーの向こうにいる理想の夢魔となす、死との結婚というリスクがあります。しかし苦しみの愛は各々の話す身体が他者の言語にたいして難解にとどまりうる仕方にも、よく関連づけられます。

そういうわけで、情動は「身体の声」ではありませんし、その自然で豊かな表現でもありません。そうではなくてシニフィアンの刻印に相関する享樂のひとつの効果のシグナルなのです。分析経験において、私たちは情動におけるシニフィアンの巻き込まれに重きを置くように導かれますが、ミレールが強調するラカンの表現にしたがえば^{xx}、それは「情動の真価を確かめる^{xxi}」ことです。かりにもっとも定番的な理解において、抑圧された真理を引き渡すことが重要であるとするなら、ララングによって身体を貫かれたアフェクション (情緒) の概念化においては、男女間の誤解にこだまするトラウマの刻印をそこから抜き出すことが肝心なこととなるでしょう。

実践のなかで苦しい愛が提示されるとき、そういうわけで私たちはそれがシニフィアンの網に自然と捕捉されるようにいたします。それは享樂を言語と共鳴させるためなのです。

(訳 森綾子)

ⁱ Lacan J., *Le Séminaire*, livre VIII, *Le transfert*, Paris, Seuil, p. 46.

[J.ラカン『転移 (上)』小出浩之他訳、岩波書店、2015年、49頁]

ⁱⁱ *Ibid.*, p.53

[同、58-59頁]

ⁱⁱⁱ *Ibid.*, p.115

[同、141頁]

^{iv} Lacan J., *Le Séminaire*, livre XIV, *La logique du fantasme*, texte établi par J.-A. Miller, Paris, Seuil, 2023, p. 157.

^v *Ibid.*, p. 144.

^{vi} *Ibid.*, p. 157.

-
- vii *Ibid.*, p. 144.
- viii *Ibid.*, p. 144
- ix Lacan J., « Télévision », *Autres écrits*, Paris, Seuil, 2001, p. 526.
ジャック・ラカン『テレヴィジョン』藤田博史他訳、講談社学術文庫、2016、p.51
- x Miller J.-A., « Les affects dans l'expérience analytique », *La Cause du désir*, n° 93, 2016, p. 110.
- xi Lacan J., « Note italienne », *Autres écrits*, Paris, Seuil, 2001, p. 311.
- xii Lacan J., *Le Séminaire*, livre XX, *Encore*, texte établi par J.-A. Miller, Paris, Seuil, 1975, p. 79.
[ジャック・ラカン『アンコール』藤田博史他訳、講談社選書メチエ、2019、124 頁]
- xiii *Ibid.*, p. 65
[同、151 頁]
- xiv 3 Lacan J., *Le Séminaire*, livre VII, *L'éthique de la psychanalyse*, texte établi par J. A. Miller, Paris, Seuil, 1986, p. 181.
[J.ラカン、『精神分析の倫理』上、230 頁]
- xv Miller J.-A., *Le Séminaire*, livre VI, *Le désir et son interprétation*, texte établi par J. A. Miller, Paris, La Martinière et le Champ freudien, 2013, quatrième de couverture.
- xvi Freud S., « Psychologie des foules et analyse du moi », *Essais de psychanalyse*, Paris, Payot, 1981.
[フロイト著作集 6、井村恒郎他、人文書院、1970 年]
- xvii Lacan J., *Le Séminaire*, livre XX, *Encore*, *op.cit.*, p. 131.
[ジャック・ラカン『アンコール』藤田博史他訳、講談社選書メチエ、2019、260 頁]、訳は訳者による
- xviii *Ibid.*, p. 132
[同、261 頁]
- xix Miller J.-A., *L'os d'une cure*, Paris, Navarin éditeur, 2018.
- xx Miller J.-A., « Les affects dans l'expérience analytique », *op.cit.* p.101
- xxi Lacan J., « Télévision », *op.cit.*, p.524.
[同、48 頁]